Journal of Indian and Buddhist Studies
(Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)
Vol. XXXIX No. 2. March 1991



Hand Exempl.

# *Aśvín-* と *Nā́satya-*

後 藤 敏 文

Vortrag gehalten 23. 6. 1990 Sendai
8. 7. 1990 Morioka

Manuskript abgeschickt 25.8.1990
(2 Verbesserungen 30. 8.)
1. Korrektur 25.11.1990 – 26.11.
2. Korrektur 1. 2. – 3.2.1991
Veröffentlichung 4. 1991
Sonderdrucke erhalten 13.5.1991

→ Gabriele Zeller, Die vedischen Zwillingsgötter. Untersuchungen zur Genese ihres Kultes. (Freiburger Beitr. z. Indol. 24) Wiesbaden 1990
: noch nicht zugänglich

〔援助〕」。日没後に現れた宵の明星が沈んだ太陽の前に回り，先導する神話の存在が背景に想定される。その際に太陽を船に収容して救出すると考える時，双神にも Dioskuroi にも特徴的な海難救助の神としての性格がうまく説明される。この主題に関し，v. SCHROEDER WZKM 9 131f. の指摘（ここでも Latvia の民謡が示唆される）は重要である（但し，祖語段階の人が直接海を知っていたと仮定する必要は無い）。

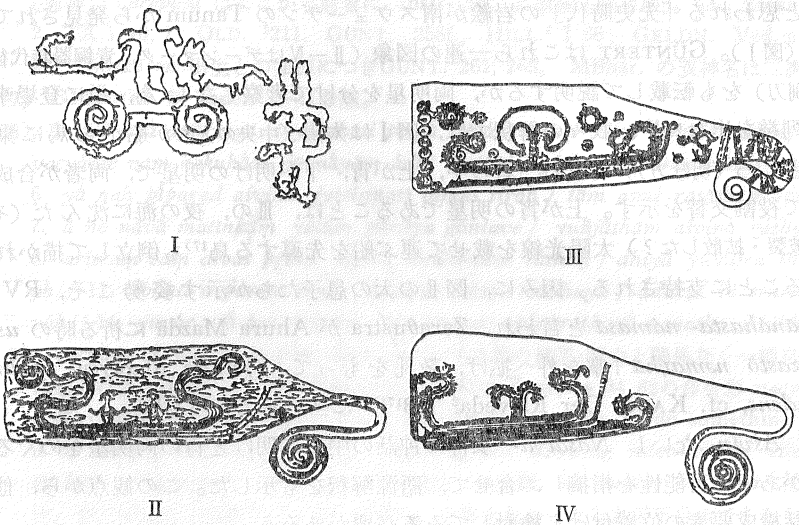
5．明けの明星は曙 *uṣás-* と太陽とに先立って姿を現し，昼の太陽の先導を務める。太陽は周知の如く一頭の馬に牽かれた戦車に乗って天を駆ける。その馬を導くとしたら *aśvín-*「馬によって特徴づけられる者，（職業的に）馬をもつ者」（伯楽・馬喰）の epitheton はこの明星にふさわしい。*aśvínā, °au* は「明けの明星たち二人」，即ち，「明けの明星と宵の明星と」という意味の elliptischer Dual と解される。すると，宵の明星が本来 *nā́satya-* と呼ばれたのではという問が浮かぶ。*nā́satyā, °au* は「宵の明星たち二人」つまり「宵の明星と明けの明星と」である。この推量は語源解釈から支持される。

6．*nā́satya-* は **nasati-* の Vṛddhi-Bildung と解し得るが[13]，印欧語根 **nes*「（困難を乗越えて）無事，家に帰り着く」に遡る，この語根については GOTŌ I. Präs. 200f. を見よ：ai. *nása-te*「（家に）集う，団欒する」，*s(u)vastí-*「安寧」<**h₁su-n̥s-tí-*「良き無事の帰還・帰宅」，gr. νέομαι「帰還・帰宅する」，got. *ga-nisan*「助かる」。**nasati-*[14]に「無事の帰還・帰宅」，*nā́satya-* に「無事の帰還・帰宅を司る」の意味が想定される。日没後の太陽を無事に導き，帰還させる宵の明星の epitheton にふさわしい。*ásta-*（=jav. *asta-*）「家，すみか，故郷」は同語根の Verbaladjektiv（所謂完了受身分詞）**n̥s-tó-* からアクセント移動によって作られたものだが，*ástam eti* という熟語で，太陽の「家に帰る」＝「沈む」意味に用いられることは興味深い（用例はAV以降）。Sapphō の有名な夕星の歌も考え合せられるであろう：「夕星よ，おまえは輝く曙が撒き散らしたすべてのものを，連れ戻す。羊たちを戻す。山羊たちを戻す。母から子を戻す」。

7．双神の手柄の一つ，*Bhujyú-* を海から救う物語が，インド・イラン共通時代の海難救助の神話に遡ることを OETTINGER IIJ 31 299–300 が明かにした。大地の涯の海／西の涯の河から *Bhujyú-*／*Pauruua-*を救助し，暁に，無事家 *ásta-* に送り届けるこの神話中にも，夜の太陽を救い導く宵の明星の神話から出たと思われる諸構成要素が発見されるが，詳細を省略し結論のみ指摘する。

△ RV X 143,5
□ Rasphā P 32

8．IV 3,6 *párijmane nā́satyāya kṣé* は双神の名が単数で出る唯一の箇所で




Güntert aa0 272—275 を基に描く

ある。韻律上の欠損を HOFFMANN bei SCHINDLER Diss. 15 は *nā́satiyāya yakṣé* と回復し，"damit der herumfahrende Nāsatya erscheint" (Inf.) と訳す。前後の文脈「Agni よ，おまえは何と言いたいのか」*kád.. agne...brávas* はむしろ，「大地を巡るNに，おそるべき奇観に…」という解釈を示唆する（[was willst du, Agni, sagen] zum erdumfahrenden N, zur Wundererscheinung)。ここに，双神一体となる前のN＝宵の明星の神話の残響が見られるかも知れぬ。その際，*yakṣá-* 'Wundererscheinung, Monstrum, Ungeheuerlichkeit'「恐るべき奇観」は単に宵の明星ではなく，これと不可分な日没後の太陽を指す可能性がある。即ちそれは *vápuṣ-*「奇観・偉観」と呼ばれている：VII 88, 2 *suvàr yád áśmann adhipā́ u ándho 'abhí mā vápur dṛśáye ninīyāt*「太陽光が岩の中にあるなら，首長（＝Varuṇa）は，それでも暗闇に向って，奇観を見る為に，私をどうしても連れていってほしい」(Wenn das Sonnenlicht im Felsen ist, möge aber der Oberherr mich zur Finsternis hinführen, um das Wundergestalt zu sehen)。[15]

9．本来，二つの明星の別の神話があり，両者が合体して，太陽の船から車への乗換えとこれを導く双神を主題とした夜明け前の神話が早くから生じていたと想像される。ṚV では太陽はもはや表面には出ないが，まさしくこの情景を絵にし

たと思われる「先史時代」の岩絵が南スウェーデンの Tanum から発見されている（図Ⅰ）。GÜNTERT はこれら一連の図象（Ⅱ—Ⅳはデーンマーク，青銅器時代後期の剃刀）をも転載して説明するが，両明星を分けて考察しない為，単に登場事物の列挙を出ない[16]。我々の解釈では，図Ⅰは太陽（中央の人）が船から馬に乗移るところ（明け方）。右下の二者の中，上が宵，下が明けの明星で，両者が合成されて役割交替を示す。上が宵の明星であることは，Ⅲの，夜の海に沈んだ（そして破裂・拡散した？）太陽光線を載せて運ぶ船を先導する鳥[17]も倒立して描かれていることに支持される。因みに，図Ⅱの天の息子たちが示す姿勢こそ，ṚV に *uttānáhasta- námasā* と言われ，Zaraθustra が Ahura Mazdā に祈る時の *ustānazastō nəmaŋhā*「掌を外へ拡げ，敬礼をもって」（χεῖρας ἀνασχών, *palmas tendens*, cf. KAEGI Der Rigveda² 183[173]）に当たるであろう[18]。

10. *Aśvín-* ないし *Nā́satya-* 双神の神話の中核に明けと宵の両明星をめぐる神話があった可能性を指摘し，合せて，語源解釈をも示した。この観点から，他の神話構成要素の位置付けも検討してみる必要があろう。

---

1）66／99回。*naasatya-*（GRASSM.，一部 ARNOLD, SEEBOLD）も可能だが不要。OLD. Noten zu I 20, 3 もおそらく *nā́satiya-* に傾く。Av. 形（注3）は °*tia-* を示す。

2）M＝ヒッタイト契約文書中の *Mitrá-*, *Váruṇa-*, *Índra-* に当る神名に続く *na-ša-at-ti-ia*-an-na。前二者はインド・イラン段階の新しい神々 *Asura-* たち（*Ādityá-*神群：社会制度の神格化）の代表。*ásura-* は *Váruṇa-*（王権の神格化）の epitheton, *ásurās* [*ādityā́s*] は ellipt. Pl. で，以下 *Mitrá-*, *Aryamán-*, *Bhága-*, *Áṁśa-* 等の総称であったろう；cf. heth. *hassu-*「王」，av. *ahu-*「主，首長」。Indra と双神が旧来の *devá-* = *daēuuă-*「天に属する者」（*dyáu-*「天」の Vṛddhi-派生）を代表する事は ṚV の讃歌数（具体名 Agni, Soma を除けば1・2位）が裏付る。

ásura = Varuna = Ahura Mazdā JUSLER JAOS 113 (1993) 596f

3）*Vīdēvdād* 10, 9；19, 43 *nā́ŋhaⁱθiia-*（Akk. Sg. °*θim*, °*əm*）；悪しき神 *daēuua-* として *iṇdra-*, *saᵘruua-*（～*śarvá-*, Rudra の別称，AV＋）と並ぶ。

4）Cf. 諸概説書；更に GONDA Dual Deities 48 ff., HAUDRY BEI 5 (1987) 172f.。

5）Cf. V 77, 2。新月→満月の満ち行く前半月，昼の長くなる前半年を吉祥とし，その対を好まぬ世界観とも関連か。夜・闇（cf. ŚB XI 1, 6, 8–11），眠り（JB I 98）は悪とされた。

6）I 181, 4 *ihéha jātā́ sám avāvaśītām arepásā tanuvā́ nā́mabhiḥ sváiḥ / jiṣṇúr vām anyáḥ súmakhasya sūrír divó anyáḥ subhágaḥ putrá ūhe*「こちらとこちら（別々）に生れ，同時に声をあげた（akt.!）。汚着のない体をもち，自らの〔様々な〕名を伴い。おまえたちの中一方は勝利ある（地上の？）庇護者で，Sの，一方は天の幸運な子と称えられている」；V 73, 4 *nā́nā jātāv arepásā*「別々に生れ汚着なき

〔両神〕」（*arepásā* はここから前者に Instr. Sg. に改変・採用か）。Cf. Yāska XII 2, TĀ I 10, 2; OLD. ²211, GÜNT. 258f., HILL.² I 66; GELDN. Ved. u. Br. 23; Dioskuren 出生との類似につきGÜNT. 261, 263。MBhār. の双神名は二次的。

7) GELDNER 訳 Index 38–41参照。

8) 1. *eṣó uṣā́ ápūrviyā vi̯y ùchati priyā́ divā́ḥ/ stuṣé vām aśvinā bṛhát//* 3. *vacyánte vāṃ kakuhā́so jūrṇā́yām ádhi viṣṭápi / yád vāṃ rátho víbhiṣ pátāt//* 6. *yā́ naḥ pī́parad aśvinā jyótiṣmatī támas tiráḥ / tā́m asmé rāsāthām íṣam//* 7. *ā́ no nāvā́ matīnā́ṃ yātám pārā́ya gántave / yuñjā́thām aśvinā rátham//* 8. *arítraṃ vāṃ divás pṛthú tīrthé síndhūnā̃m ráthaḥ / dhiyā́ yuyujra índavaḥ//* 11. *ábhūd u pārám étave pánthā ṛtásya sādhuyā́ / ádarṣi ví srutír diváḥ//* 14. *yuvór uṣā́ ánu śríyam párijmanor upā́carat/ ṛtā́ vanatho aktúbhiḥ//*

9) *vacyá-te* cf. GOTŌ I. Präs. 280。fientiv（主語の意図・努力と関係なく一種自動的に起る行為・現象）との判断に対する JAMISON Kratylos 34 62の命令形 *vacyásva* に基いた非難 Can one o r d e r (Js Sperrung) someone to do something that is by nature automatic, neither requiring nor allowing intention or efforts? は Iptv. の機能次元の問題を混同した錯誤・無見識。*sei ruhig, be quiet,* 花よ咲け，緑は萌えよ，成長せよ，陽は微笑め，と言えなかったらさぞ不自由であろう。

10) *yád... pátāt* は Finalsatz mit Konj. (so daß... dahinfliegen soll)。HETTRICH Hypotaxe 352 は generell. Konj. の条件節（GELDN. "wenn..."）として収録。

11) *vana-* cf. GOTŌ 284。

12) Cf. IV 43, 5 *urú vāṃ ráthaḥ pári nakṣati dyā́m ā́ yát samudrā́d abhí vártate vām*「遠く，おまえたちの戦車は天にめぐり至る。海から〔来て〕おまえたちの為に回転して行く時」; *sindhu-vāhasā* V 75, 2, *ap-túr-* I 118, 4; VIII 26, 18。

13) Cf. GÜNT. 259 (: **nes* の意味を「救助に駆けつける」とし，*N*を「二人の救済者」)。諸説 cf. MAYRH. s.v.; MICHALSKI RO 24 19ff., THIEME Fs. Risch 173[25]，(両者 LOMMEL「鼻腔から生れた者」に従う)，HOLLIFIELD Sprache 26 176。

14) *-ati-:* GÜNT. のあげる *vasati-*, *aṁhati-* の他，AiG II–2 628, 642 の例参照。

15) 欠損は haplologisch な脱落 °*yāyaya*°＞°*yāya*° に止らず，単数を不自然と感じて Du. (Nom. になるが) により *nā́satyā yakṣé* としたことが始めかも知れない。

16) GÜNT. はⅢのマストの光を St. Elmo の火に当てながら，船が夜の海を行くという考えに至らない。あくまで昼の天を走る船を考え，馬との関係は考慮されない。太陽と明星そのものに馬の姿をした神を想定していたかと推察される。

17) GÜNT. は Aśvin を牽く *haṁsá-* たちを示唆，倒立には触れない。

18) 本来手に武器のない印か。Cf. HOFFMANN bei MAYRHOFER Ⅲ 743, GOTŌ 196。

〈キーワード〉 Aśvin, Nāsatya, Ṛgveda, 神話，語源，金星

（岩手大学助教授．Dr.phil.）

1) Rasā ("de(r) Ringstrom um die Erde, de(r) Horizont-Ozean, der die Erde von Himmel und Unterwelt trennt" KRICK WZKS 16 p. 35)

Rasjhā P 32 ("de(r) die Welt im Westen begrenzende Strom" OETTINGER MM 31 p. 300)

2) Aśvins kommen morgens und abends VII 22,14
X 39,1
X 40,4

[illegible] 54 18

3) Osadhi-tārakā DN II p. 111 8,25
vgl. SN I 65
Itiv 20,14 (PTS 245 ad 79)

KS VIII 3: 88,9 = KpS VIII 1:

agnir vai prāñ udetuṃ nākāmayata. tam áśvenodvahan. yat pūrvam udavahaṃs, tat pūrvavāhaḥ pūrvavāṭtram.

"Agni hatte kein Verlangen danach, (als Sonne) im Osten aufzugehen (bzw. aus dem Mutterleib zur Geburt herauszukommen). Ihn führten sie (die Götter) mit einem Roß heraus. Weil sie ihn als Vorderen (pūrvam, bzw. hier adverbiell: nach vorne) herausführten, darum heißt [das Roß] pūrvavāh." KRICK 383